

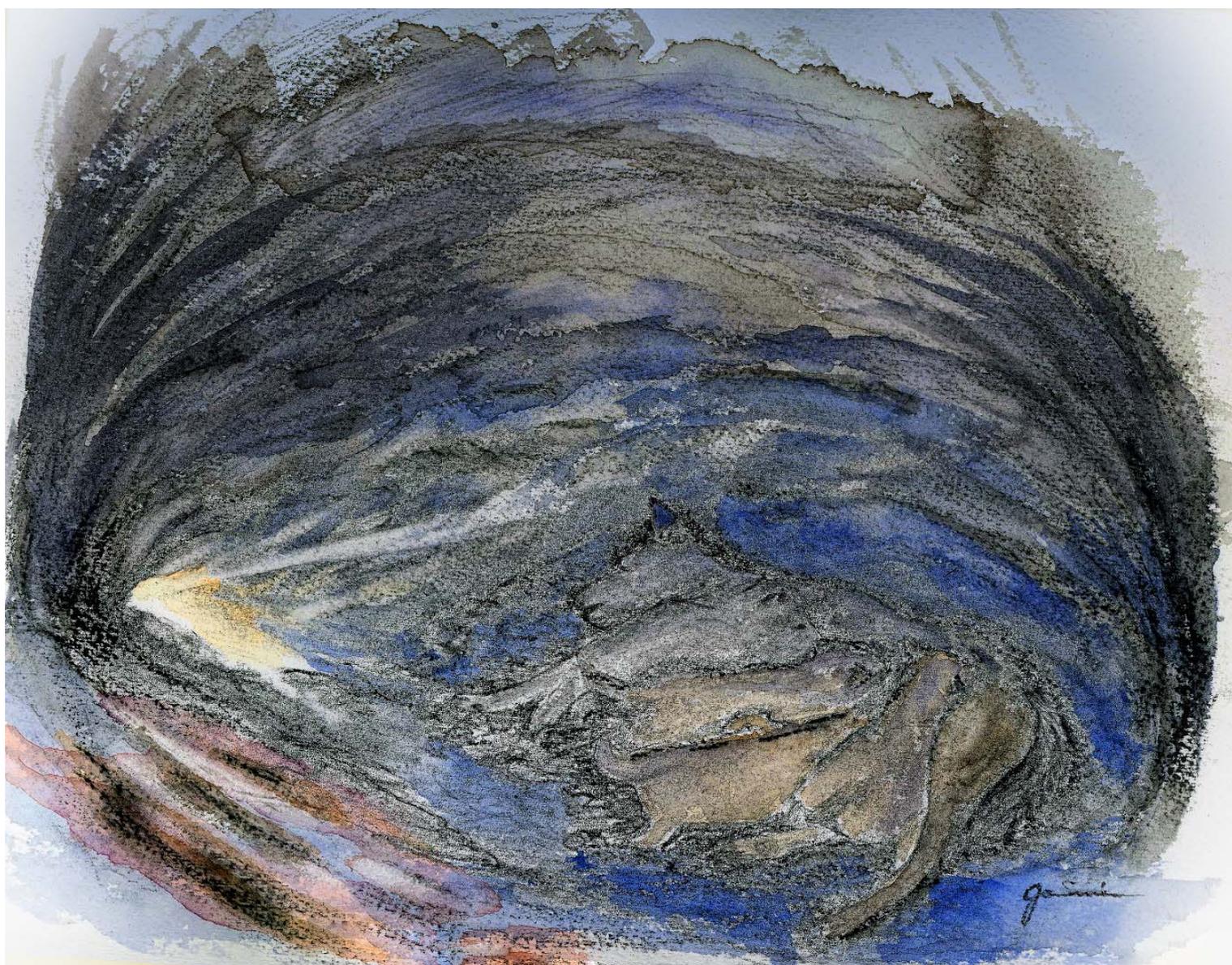
NPO 法人



2016年6月10日

第30号

Jomon Shiba



特定非営利活動法人

縄文柴犬研究センター

縄文柴犬研究とJSRC(歴史的な視点からの試み) 五味靖嘉	2
おたよりコーナー ☆雷神だより 15 大怪我を乗り越えて 京都府 金平雄	7
☆和歌山県 西川直美	8
☆コロの近況 奈良県 榊井 誠	8
☆山形県 東出景子	11
☆秋田県 藤原庸子	12
☆縄文柴犬とともに 長野県 肥田恵司	12
☆クルミを食べる 石川県 黒梅 明	12
☆この会に入って良かったと思うこと 和歌山県 土山仁美	13
*シバの散歩道(根深 誠)は、今号は休みです。次号に掲載を続けます。	
2016年度総会報告	14
新潟県十日町市交流会案内	19
事務所報告	
☆新入会 ☆会費 ☆仔犬登録 ☆寄贈	20

※年度会費の納入と、交流会参加申し込み書の返送のお願い

- ◇今年度の会費納入のお願いと振込用紙を同封しました。納入をよろしくお願ひします。
・会費や寄付などをお寄せいただいた方の氏名・県名を掲載させていただきますが、匿名を希望される場合は、お知らせください。
- ◇今年度の交流会を新潟県十日町市で開催(7月16日)します。今号に会場案内を載せていますので、ぜひご参加ください。参加申し込み・愛犬のしおりを同封しました。記入して返送ください。

◆31号発行は2016年9月10日予定。原稿の締め切りは2016年8月20日です。
※お願い: NPO法人JSRCは総会の議に基づき、事務所変更について検討しています。当分の間、これまで通り、事務所は秋田県大仙市の五味宅としますが、会の運営にかかわる連絡や会誌関係の窓口は黒梅が担当場合があります。よろしくお願ひします。

・会誌の原稿は編集担当の黒梅明(〒920-1302 金沢市末町14-60-2)、もしくは会事務所に送付いただくか、MLまたは会事務所へメールで送信ください。ぜひ、愛犬の写真も添えてください。

特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター

会事務所：〒014-0073 秋田県大仙市内小友字堂ノ前119番地5 ☎0187-68-2976
<http://www.jomon-shiba.com/> encounter_shiba@jomon-shiba.sakura.ne.jp
 郵便振替口座：02280-2-106951

* JSRC の創立から今日まで縄文柴犬の飼育・繁殖・研究に尽力されてこられた五味さんに、JSRC の歴史を振り返っていただき、縄文柴犬の特徴と JSRC の意義について記述をいただきました。会員の皆様の学習資料として読まれますことを期待します。長文ですので、今号より数回に分けて掲載します。(編集部)

縄文柴犬の研究と JSRC (歴史的な視点からの試み)

五味 靖 嘉

1. はじめに

人類の誕生は、地質学でいう 400~500 万年程前 (第三紀鮮新世の始め) になる。通称「ラミダス猿人」は、歯や頭骨、四肢骨がエチオピアからケニアで発見され、二足歩行と考えられていた。森林の後退や草原が広がるという環境が、二足歩行への重要な進化につながったと考えられている。

140 万年から 170 万年ほど前に、猿人から進化した原人はアフリカから、中近東を經由して西はヨーロッパ、東はアジアへと拡散した。アジアで最も古い原人の化石は、30 万年前のインドネシアのジャワ島で発見されている。沖縄で発見された「港川人」は 18000 年前とされ、アジア南部中国の「柳江人」と似ているが、北部の「山頂洞人 (河北省)」とは違っていることから、港川人は中国南部からという可能性を示している。

しかし、日本人の起源についてはそう単純ではない。生化学・人類学・考古学などの学説では、「東南アジア系の縄文人」の居住した日本列島に、「東北アジア系の弥生人」との混血による「二重構造論」が主流になっている。

イヌの起源は、古生物学者のヘッケル (E. H. Haeckel) によれば、今から約 5,000 万年前の始新世に出現したミアキス上科の動物から進化した哺乳類・ブルパブスと言う肉食性の動物が居て、この動物からイヌ科・ネコ科・イタチ科などが進化したと言

われている。

このブルパブスからは漸進世 (ぜんしんせい) 初期の 3,500 万年前になるとヘスペロキオンと言う最古のイヌ科動物が北アメリカに出現した。(図 1)

このヘスペロキオンは、ネコほどの大きさで胴と尾が長く肢 (あし) が短く前後の指は 5 本ずつ、歯はイヌと同じ 42 本あり、頭蓋の中はやや広く、吻はそれほど長くなかった。このヘスペロキオンの胴体が長かったと言う事は、弾力的な動きであったことを意味する。イヌの動物分類学上の位置は、哺乳類の食肉目・イヌ亜科・イヌ属にあって、学名を *Canis Familiaris* と、スウェーデンの学者リンネにより命名された。犬科動物には、14 属 39 種が含まれる。イヌ属の仲間には、4 グループがあり、オオカミ・コヨーテ・ジャッカル・ディンゴが含まれる。

イヌは人に飼われるようになって、大小や性質、その他様々な特徴を持つようになり、現在では、500 種とも言われる程にいろ

図 1 ヘスペロキオン「イヌ(教育社)」より



いろいろな種類が増えた。これは、大昔から人為選抜しながら育てた結果として、多様化したといえる。しかし、犬は大昔から余り変わらない姿や性質も沢山持っている。私たちが日常親しんでいるイヌは人類最古の家畜で、人の住むところに必ずその姿があったと考えられ、その起源や進化についてはまだ研究途上にある。

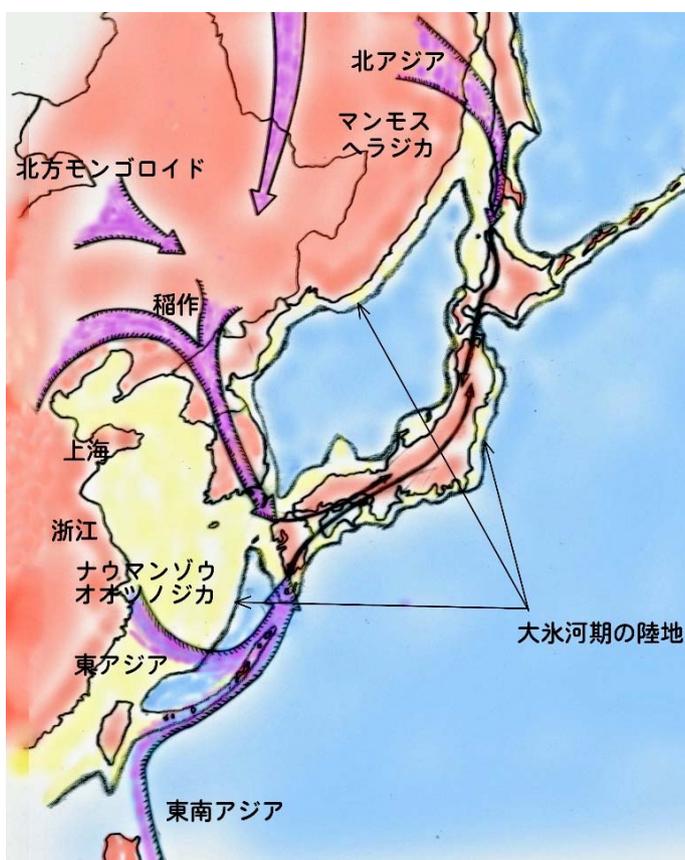
2. 日本犬のルーツ

日本列島が生まれる前は、アジア大陸と陸続きで、大氷河時代と呼ばれて、氷河の発達・後退を繰り返していた。北方からはマンモス、ヘラジカ、トナカイ、ヒグマ、ナキウサギ、キタキツネなど、南方からはナウマンゾウ、オオツノシカ、カモシカ、ニホンジカ、ツキノワグマ、ニホンザルなどが移り住んでいた。動物たちと同じく、それらを追って大陸の旧石器時代人も大陸から移り住んできたと推定される。その後、日本列島が大陸より切り離されることにより、それら動物や人類も独自の進化を遂げることになる。後期更新世の最終氷期は 20,000 年～12,000 年前になり最も寒い時期とされている。海水面は現在よりも 100～140m ほど下がって、当時の気温は現在よりも年平均 7～9 度低く、日本列島は大陸の一部となっていた。

日本列島の誕生

我が国がユーラシア大陸から離れ、島国となり温暖になった時期、地質年代では更新世が終わり、完新世の始まりの 11,500 年前頃から縄文文化が始まったとされる。考古学上では、土器と弓矢の出現による狩猟があり、ヒトとイヌの協働が考えられる。今のところ、イヌの最も古い発掘例として

図2 氷河期から日本が島国となった頃と、ヒトとイヌが移動した想定図-五味画



は 9,500 年前とされている。上黒岩岩陰遺跡から 2 個体の埋葬骨が出土(江坂ほか,1967)したが、長いこと行方不明とされていた。それが最近、慶應義塾大学で見つかり、「放射性炭素年代測定」による年代が 7,300～7,200 前であり、長谷部の区分による小級と中小級と報告された。

縄文人がイヌの死を悼み埋葬していたことは、決して単純な家畜ではないヒトとの関係を考える、重要な課題でもある。

前述のような日本列島史を考えると、推測では、それよりも古い年代にイヌが居たと考えられる。寒冷期の頃の旧石器時代、近隣からのルートによって、ヒトとイヌが往来していた可能性がある。しかし、1 万年より遡ったイヌの歴史については、殆ど

判っていない。

家畜化のはじまり

現在では、ドイツのオーバーカッセル洞窟で発見された 14,000 年前のものとされる下顎骨が最も古い。(シリアのドゥアラ洞窟から 38,000 年前のイヌと思われる遺体の報告もある。その他にも古い年代のイヌらしい遺体の報告があるが、ハッキリしない。)

北イスラエル、ヨルダン渓谷の上流では 12,000 年前に、老女の遺骨と一緒に埋葬されていた仔犬の骨格が発見された。(図 3) その後同じイスラエルの別なところからも、成熟した 2 頭のイヌが発見されている。最初の、犬の家畜化で有力なのは、「ヨーロッパやアメリカではなく、東アジアではないかと、言われている。

図 3 イスラエル、ヨルダン渓谷



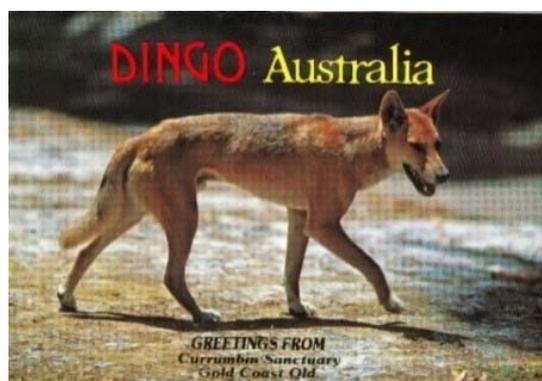
イヌについての研究

イヌの祖先について、これまでにはローレンツ博士の主張した、イヌの性格や行動

がジャッカルに似ているという説が、後に否定された話は有名である。二つ目は、もともと野生犬であったが、今は絶滅したとする説、三番目はオオカミ説である。

最近では、オオカミ説が最も有力だが、二番目の説、つまり野生犬説も浮上している。野生犬の原型とするのは、オーストラリアのディンゴ(図 4)やパリア犬(インドから地中海沿岸にかけて分布)だと考えられている。

図 4 ディンゴ



日本犬の先駆的探求では、動物学の渡瀬庄三郎、内田亨、犬飼哲夫、鏑木外岐雄、人類学の長谷部言人、考古学の直良信夫、日本犬研究の斉藤弘吉、平岩米吉他、などになる。しかし、何といたってもシーボルトのニホン動物誌に描かれている「狩り犬」と「町犬」を区別し、前者を在来種、後者を混血と推定していた点は見逃せない。(久我,1985)

こうした歴史上の背景を踏まえ、縄文(縄紋)時代のイヌは、日本の在来犬として多面的な研究が求められる。私は、縄文時代のイヌとの相似性、原種性がある、という特異な意味に於いて、今後の研鑽と保存が必要であると考えている。

また、この縄文柴犬は、凡そ 1 万年前の

原型に近い形態を残している点が、世界でも類例を見ない貴重な存在である。先学の研究成果によって明らかになりつつあるが、新しい犬種を意味するのではない。

図 5 シーボルトの狩りイヌ

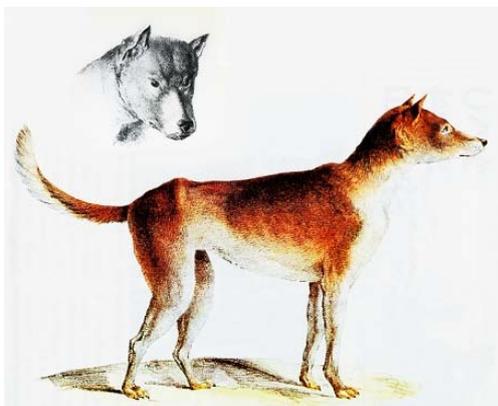
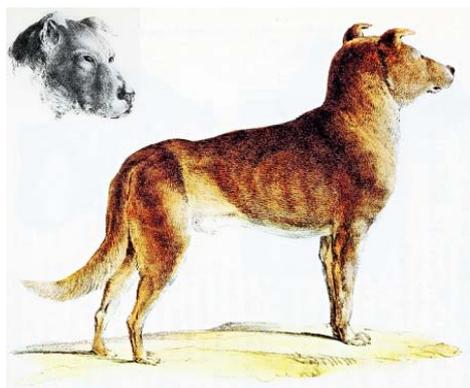


図 6 シーボルトの町犬



3. 縄文時代のイヌと縄文柴犬

「縄文柴犬」とは、新しい犬種ですか? 「日本犬」とはどんな関係があるのでしょうか? このような質問を受ける事が多くなっている。また、東京・上野にある国立科学博物館の「日本館」に於いては、「縄文人の家族」というコーナーに縄文時代の犬がレプリカで再現されている。この犬のレプリカは、発掘された犬骨データを基に、精密に作成されたと聞かすが、私達が飼育している「縄文柴犬」と体躯構成や顔貌まで、ほぼ同じになっている。(図 7. 8)

図 7 絵ハガキ部分



図 8 縄文柴犬



縄文時代のイヌ

縄文時代のイヌは額段が浅く小級(長谷部 1952 表 1 参照)から中小級の単一系統で、品種改良がされなかった。原始的な特徴として、イヌの祖先であるオオカミに近い形態ということが出来る。(茂原 1989)

考古学で獣骨に詳しい金子浩昌 (1984) 先生は、北海道から西日本、南西諸島に至る地域で飼育されていた縄文時代のイヌは、肩の高さ 36~46 cm位、額から鼻面の線が、一般的な柴犬のように凹まず、ゆるやかな傾斜で伸びます、と分析している。

血液蛋白質からみた日本犬の成立について、田名部先生(1989)によると、南方アジアの犬が先に入って来て、古い型の額段の浅い犬ができ、次いで朝鮮半島から新しい犬が入ってきて、その遺伝子の流入があったと考える、と述べている。

表 1 長谷部言人 (1952) によるイヌの型区分 (抜粋、単位はmm)。(動物考古学 2009No. 26 より部分)

	小級	中小級	中級	中大級	大級
頭蓋最大長	-155	156-170	171-185	186-200	201-
下顎骨長	-113	114-124	125-135	136-146	147-
上腕骨長	-120	121-135	136-150	151-165	166-
橈骨長	-115	116-130	131-145	146-160	161-
尺骨	-140	141-155	156-170	171-185	186-
大腿骨長	-135	136-150	151-165	166-180	181-
脛骨長	-130	131-145	146-160	161-175	176-

また、DNA 分析に詳しい石黒直隆先生は、古いイヌから検出した mtDNA ハプロタイプは、現生犬に含まれていないが、古代の遺跡から出土したイヌには含まれていた。人為的な操作が加わる前のイヌの方が遺伝的に多様性を示し、日本の古代イヌの祖先は、中国大陸に由来していると述べている。

人類学の分野では、東南アジアに住んでいた古いタイプの集団が、温暖化の日本列島に住み着くが、気候が冷涼化によって北東アジアの集団が渡来してきた、というイヌと似たような二重構造モデルが考えられている。(埴原,1997)

霊長類からヒトの進化を研究している茂原信生先生は、日本犬の起源と形態の研究でも知られていますが、縄文時代のイヌの頭蓋最大長はオスが 160 mm 前後(中小級)、メスは 150 mm 前後(小級)であり、この時代のイヌは前頭部から鼻先にかけて直線的で、額段あるいはストップが小さい、と分析している。

ここで言う「額段・ストップ」の定義を明らかにしなければならない。この表現は古くから様々な文献に散見するが、具体的な計測方法と数値を示したのは茂原(1984)先生からになる。(図 9 参照)

縄文柴犬とは

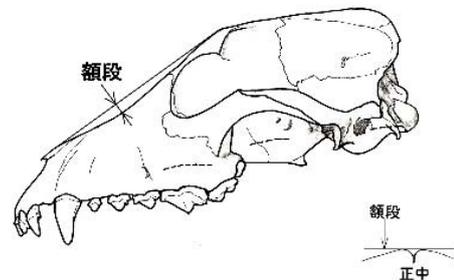
額段(ストップ)が浅く小型である

縄文時代のイヌは額段が浅く小級から中小級である。(表 1 参照)その縄文時代のイヌとは異なるが、頭蓋など良く相似し、品種改良を目的とせず、原種性を保ち続け

ているわが国の在来犬種を指し、額段の深いタイプの犬とは異なる。この額段の深さは犬の系統を調べる重要な標識になり、現在の日本犬は深いものが多い。韓国の珍島犬・済州島犬も深いのである。

現存する縄文柴犬を見て、「縄文イヌを目の当りに見る思いです。」と、金子先生は風貌の相似性を指摘されるなど、貴重な存在であると述べている。

図 9 額段(ストップ)



縄文柴犬として重要な事は、小型の犬で、額が広く後頭部が発達し、額段 (ストップ) が浅く面長で、口吻部は太く頑丈である、という事である。またこうした頭蓋や顔貌については、おおよそ 1920 年以降から、研究報告などで述べられていることである。

* 続く



「十日町市」交流会のご案内

会場：三省ハウス 新潟県十日町市松之山小谷 327 ☎：025-596-3854

日時：7 月 16 日（土）12：00 現地集合、17 日（日）10：00 現地解散

内容：昼食、愛犬自慢・会員交流、縄文柴犬についての学習、夕食後親睦会

参加費：無料。ただし、16 日夜に宿泊される方は一泊 2 食付き 6000 円負担あり。

*16 日昼食を会場で摂られる方は実費負担が必要です。

三省ハウス



*会場：三省ハウスは、集落の丘の上に建つ築 50 年余の木造校舎を改築した宿。かつて教室だった空間に 80 床のベット(各 16 床、5 教室)があります。



*宿泊費は 1 泊 2 食付きで 6,000 円です。

新潟県南部に位置する十日町市。その中央には日本一の大川信濃川とその支流である渋海川や清津川にはぐくまれ、古くから豊かな文化を咲かせています。

日本有数の「特別豪雪地帯」である松之山地域は、長野県との県境にある山あいの雪深い地域です。平均積雪は 3m を越え、多い年は 5m にもなります。春になるとその豊富な雪解け水は棚田へ溜まり、雄大な大地を育みます。美しいブナ林も点在し、「美人林」と呼ばれるブナ林には、年間を通じて多くの観光客が訪れます。

日本三大薬湯のひとつ「松之山温泉」は、塩分が強く、冬でも湯冷めをしにくいのが特徴です。



*車のルート案内

- 東京方面から（東京から約 3 時間）
関越自動車道 塩沢石打 I.C → R353
- 金沢方面から（金沢から約 3 時間）
北陸自動車道 上越 I.C → R253
- 名古屋方面から（名古屋から約 4 時間）
中央自動車道—長野自動車道—上信越自動車道 豊田飯山 I.C → R117
- 新潟方面から（新潟から約 1 時間 40 分）
関越自動車道 越後川口 I.C → R117
- 関西方面から（大阪から約 6 時間）
名神高速道—北陸自動車道 上越 I.C → R253

◆申込用紙を同封しましたので、必要事項をご記入のうえ、受付に送付してください。

◆参加・不参加にかかわらず、愛犬の様子などお知らせください。会誌掲載に使わせていただきます。

◆申込用紙等の投函は、宿泊予約等の関係で 6 月 30 日必着、黒梅・相澤までお願いします。

◆車を置く場所や犬をつなぐ場所等は準備しますが、犬の管理は各自の責任でお願いします。

皆様の参加をお待ちしています。◇交流会現地責任者：相澤重美 受付事務局：黒梅 明